

くれはの森から(1)

— 自然保護を考える —

元富山保健所長 中川 秀幸

私と呉羽の森

呉羽丘陵は富山平野の中央部に位置し北東から西南に細長く伸びた丘陵で、昭和42年に呉羽山、城山を中心とした県定公園に指定されている。ここには遺跡、名所も多く人々とのかかわりの深い里山として古くから親しみをもたれ、また呉東、呉西という言葉があるように富山県を二分する丘陵としても富山県人になじみ深いところである。

私がこの呉羽丘陵の城山のふもとに住むようになってから20年近くなるが、この地に居を定めた最大の理由は、呉羽丘陵の豊かな自然に四季を通じて親しめるということであった。

私は幼い頃から昆虫に興味をもち、現在でも採集、観察を続けているが昆虫を通じての観点からも呉羽丘陵の存在意義は大きいと感じている。

この呉羽丘陵を富山市は国の補助を得て平

成3年から「健康とゆたかの森整備事業」として8億円をかけて3カ年計画で整備を進めているところであるが、私がこの事業が行われているのを知ったのは平成4年3月であった。多くの樹木が伐採され機械で表土が削りとられ赤土がむきだしになっている無残な姿をみたときは余りのことに呆然と立ちすくんだものである。

その後、この事実を知った市民グループや自然保護団体が立ちあがり、市の整備に対する批判と反対運動が展開されることになった。

整備事業の経緯

ここで市が呉羽丘陵開発に取り組んできた経過について簡単にふれてみよう。そもそも呉羽丘陵問題は富山市が呉羽町を合併する条件として「呉羽の観光開発」が呉羽町から要求され、それに対処するために種々の計画が立案されたことに端を発する。幾多の曲折を経て最終的には土地の買い上げという形で実

図1 くれはの森の伐採状況



行に移されたわけで、昭和38年から43年にわたって富山市により丘陵の土地の買い取りが行われてきた。また昭和42年には県定公園に指定され、昭和53年には呉羽丘陵全体を観光開発しようという構想から「富山市観光調査」が行われ、昭和55年には「城山公園土地利用基本構想」（ファミリーパークの原型を含む）が策定されている。またこの年に呉羽丘陵自然環境調査が県自然保護課によって行われた。そして59年に生物学者、考古学者の反対などで、当初の計画よりは可なり縮小された形でファミリーパークの開園となった。

今回の「健康とゆりの森整備事業」は平成3年に立案され地元自治振興会長などに説明会が行われた後、同年10月に工事が開始された。そして市民が自然破壊にも通ずる工事の現状を知ったのは平成4年春以降である。

自然保護団体の反対と市民の関心

同年5月には「県野鳥保護の会」から「事業の一時凍結と公聴会の開催」を求め要望書が提出され、その後市民グループや自然保護団体から多くの要望書が出されている。市当局はこれらの要望により野鳥の繁殖期をさけて8月まで、一時工事を中止することを決め実行に移されたが、自然保護団体の反対を無視し10月には工事が再開され冬期間を通じ大量の樹木の伐採や竹林の皆伐、道路の整備が進められている現状である。この間、この事業が富山県の宝というべき自然度の高い森の

図2 呉羽ハイツから見た「くれはの森」



(中央伐採あと、右手が残った景観)

破壊が進展し取返しのつかない状態になるのではないかとの懸念から多くの市民の関心が集まりマスコミからも取り上げられた。

整備事業に対するマスコミの動向

平成4年5月27日の北日本新聞で「呉羽丘陵の整備は慎重に」という社説が掲げられホクリクサンショウウオなど貴重な生物の息が危機にさらされていることを訴え、また100haを越える整備事業で自然環境が変わるのに環境影響調査（環境アセスメント）をしていないことを指摘し、森林の開発でなく再生事業だからアセスメントの必要はないという富山市のいい分に対してもアセスメントの対象外とはいえ、豊かな自然は県民、市民の共通の財産なのだから大規模事業によって環境がどう変わるか。の調査をし、予測と評価を市民に知らせ、事業の目的にも沿い環境を守る手だてを市民と一緒に考えることが望まれるとしている。

また朝日新聞でも平成4年9月29日から5回にわけて「ざわめく森で」－呉羽丘陵整備事業を追う－として詳細に問題点を浮きぼりにして報じている。週刊誌では10月27日発行の週刊ポストで「人里の森が危ない」－ほっとかれない森・富山県「呉羽の森」のケース－として河野昭一京大教授の談話をのせている。テレビ、ラジオでも市当局、賛成、反対相方の言い分や巷の声を聞くなど、この問題を取り上げている。

呉羽の森を考える会の発足

平成4年9月に自然保護に関心を持つ市民グループで「呉羽の森を考える会」が新たに設立され、市当局や事業賛成を表明している地元の人達と十分話し合い他の自然保護団体とも連携を保ちながら何とか自然をできるだけ損なわない配慮のもとで整備を進める方向を見出したいという考え方で市との交渉が開始された。

図3 梨畑から呉羽ハイツを望む



そして10月6日付けで富山市長に「呉羽丘陵整備事業に関する要望書」を代表に押された私の名前で提出した。これには、われわれの主張が詳細に盛り込んであるのでかなりの長文になったが、ここにはその要点を簡単に記するにとどめ、後程われわれの考え方をのべる中に引用していきたい。

まずこの整備事業には多くの問題点がありこのまま続ければ将来に禍根を残すと思われたので再考を求め、その内容について生態学的立場から森林の効用と現在行われている伐採や林床植物の刈り込みによる影響と実害について具体的に述べ、人の入りやすい明るい森にする市の意図に対し反論し、あまり人の手の入らない自然の森こそ貴重で保全すべきものだというわれわれの考えを示した。そして呉羽丘陵をどのように整備し次代に伝えるのがよいかを県内外の専門家や市民の声をよく聞き早急に環境アセスメントを実施することを提言した。

その後「呉羽の森を考える会」の最初の行事として、平成4年10月31日に地元の杉谷地区で、続いて12月13日に吉作地区で市の整備事業に対する賛成派も反対派も一同に会し白紙の立場で議論し何らかの接点を見出すことを目的とした公開討論会を開催した。

最初の討論会では「呉羽の森はいかにあるべきか」という表題で行い、それを受けて次は「呉羽の森をいかに整備すべきか」というパネルディスカッションを行った。しかし残

念なことには、何れにもわれわれの要請にもかかわらず県、市当局の出席はなかった。

討論会「呉羽の森はいかにあるべきか」

第1回目は、私が司会をつとめ、発言者として本会事務局の九鬼とも子さんから「整備事業の経過と内容」の説明があり、次いで「地元はこう考える」と杉谷自治振興会長の村藤政雄氏から事業推進の立場から、次に「私の考える健全な森の姿」として富山大学教養学部環境科学小島寛教授から、最後に「初年度事業の与えた影響－昆虫を中心に－」と題し富山医薬大寄生虫学部助手荒川良氏から発言があった。更に追加発言として奥田設計事務所の奥田利雄氏、富山医薬大寄生虫学上村助教、富山国際大学佐々学学長（前富山医薬大学学長）からの提言がありその後参加者全員での総合討論を行った。参加者64名、予定の2時間半をオーバーする熱のこもった討論会であった。

村藤氏は、地元の土地を売ってから30年間も放置され、森は荒れ放題になっている。特に竹林の拡大による畑地などの被害が大きい。やっとわれわれの要望の实った矢先の反対運動に困惑している。整備することにより市民が自由に入れる憩いの場としての自然利用を要望した。

小島教授は、木一本切るなどいうのではない。自然のまま残していく部分と手を入れていい部分と区別して利用すべきである。そのためには綿密な事前調査が必要で、それに基づいて整備を実施すべきである。市の整備は無差別、ずさんで将来に禍根を残すものであるとした。

荒川氏からは、呉羽丘陵の豊富な自然と整備の影響、特に蝶類の減少について述べ、樹木の伐採や下草刈りにより明るい森にすることでノネズミの侵入によるツツガムシ病発生の危険についてもふれられた。そしてそれぞれの助言者から適切な助言があったが、最後

図4 竹材の伐採あと



(竹による砂防柵が見える)

に佐々学長から貴重な御意見をいただいたので、ここにその要旨を述べる。

佐々先生の御意見

—原生林の緑を取り戻すには—

討論会の前は整備に反対している人たちが「呉羽丘陵に一切手を加えるな」といっているのかと思ったが、合理的な手の入れ方を提案しているので安心した。森に対する概念は随分変わってきた。昔は「森は金になる木を植えるもの」だったが今は「森は自然として非常に大切」というふうに。

緑化についても昔と今では、その考え方や手法に大きな違いがあると思う。私は以前所長をしていた筑波の公害研究所を造るときに周囲の緑化を横浜国大の宮脇先生にお願いした。宮脇先生は、原生林を人間の手で再現する計画を立てられた。人のいない時代の森である原生林が最も安定したバランスを持っているから。しかし所内では、松の木と芝生の方がよいという意見もあり、2種類の緑化を試みた。その結果、今では原生林は見事に育ち小鳥や小動物の住む豊かな緑となり、もう一方は非常に手のかかる貧弱な緑となっている。富山市の稲荷町公園もこの方法で再現した森である。10年たった現在、公園は深々とした緑に包まれている。しかし、この方法はどこでも成功しているわけではない。富山医薬大では成功していない。

図5 城山を走る車道横の伐採状況



原生林のような深い緑を取り戻すにはどうすればよいか。この新しい緑化については、まだよく分からないことが多く試行錯誤の段階だと思う。新しい緑化について市町村には新しい価値観にもとづいた緑化のことをもっと勉強してもらって市民と一緒に呉羽丘陵の緑のことを模索して欲しいと思う。私からも、富山県、富山市に助言する。急がずにやっぺいこう。というものであり、全く適切な御助言で感銘深いものがあつた。会場からもひときわ高い拍手がわいた。

討論会のまとめと要望

呉羽の森を考える会では、この討論会の結果を次のようにまとめ、富山市長に報告と要望を行った。

地元の人々も自然保護グループも森を愛する心は同じで、呉羽丘陵はみんなの楽しめる森として手を入れることは必要である。ただ問題は富山市の整備のやり方が私たちの森を愛する気持ちに沿うものか否かである。今後はどんな方法でどの部分に手を入れればよいかについて賛成派も反対派も更に接点を見出す努力をして、継続して話し合いをすべきである。富山市のこれまでの「聞くべき意見はきいた。すべきことはした。」という態度を改めて別記(上述)の佐々学長の御意見の内容を誠心誠意検討され整備のすすめ方に反映するよう要望する。というものである。

しかしその後も間伐の域を越えずきんな伐採が続いている中で第2回討論会「呉羽の森をいかに整備すべきか」をテーマにパネルディスカッション形式で行った。

パネルディスカッション

「呉羽の森をいかに整備すべきか」

座長には、小島覚富大教授、パネラーとしては私、中川幸幸日本健康倶楽部富山診療所長(元富山保健所長)、小原英雄富山大学ムササビ研究会代表、森吉雄梨選果場長、相山己紀雄設計士がつとめ、助言者としては、前会同様佐々学長、上村助教授それに村藤自治振興会長が当たった。

小原氏は興味あるムササビの生態についての、ムササビの神社の森などの住み家と餌場としての呉羽の森の関係にふれ整備により餌場がうばわれた場合、果樹園や農家庭園の被害の可能性を指摘するとともに、ムササビの観察が子供たちの自然教育に役立つものとの見解を示した。

森氏は、地元の永年の念願である開発事業によそ者が口を出して、それをはばむことはしないよう、また、人間の生活をこそ重視すべきで、動物がいなくなっても人間の生活と何らかかわりがないではないかといった意味の発言があった。また村藤氏からは、呉羽の森を木造の施設をつくるなど、木の文化のメッカとする一方、薬の富山のイメージアップとして呉羽丘陵の一角に世界の薬草を植え、大薬草園の造成といった構想の提案がなされた。

それぞれの発言者の貴重な意見、フローアからの市のずきんな整備に対する批判、田中忠次富山県昆虫同好会長からの昆虫を中心とした自然保護に対する意見など積極的な発言があり、桂木健次富山大学教授(自然保護団体連絡協議会代表)からも市の整備事業に対する問題点を詳細にのべられ、問題の本質の理解に被益するところが多かった。また、楡

原中学山野浩平教諭から理科を教える立場から、生徒に自然のありのままの姿を教えようとしているが、呉羽丘陵はこの整備によって森とはいえない姿になりつつある。中学理科では「森の構造は高木、亜高木、低木、草本、コケの各層からなり林縁にはつる植物が林を包み、内側の樹木や生物を守っている」と教えているが、整備された森はこれにあてはまらないのみか森自体の消失にもなりかねない。丘陵を教育の場として考えるならば、整備計画にはもっと現場の教師の意見を反映させるべきだ。」という傾聴すべき意見も出た。

最後に私の発言の内容をここに述べひと先ずこのディスカッションについて締め括りたい。

私の役割のひとつは、前回の討論会の結果を踏まえて問題をのべることだったので、先ず事務局のまとめた地元と市当局と本会の意見の対立点を示す。

図6 両側を伐採して新設された遊歩道



整備について意見の対立点

1. 現在の呉羽丘陵をどうみるか

- 〔地〕・竹の繁茂などによって土地は荒れ放題
- 〔市〕・竹や雑草木などの繁茂により森林の状態が悪化している。
 - ・長期間放置したため二次林が荒廃した状態
- 〔会〕・人の手の入った二次林であるが放置

されたことによって本来の自然の森に近づきつつある。

- ・森は荒廃ではなく成熟してきている。

2. 今後 呉羽丘陵はどうあるべきか

〔地〕・我々の先祖が大切に育ててきた山なので、今までの荒れた状態で放置することにしのびない。

調和のとれた自然(昔の里山)を継承することが、先人への感謝であり、子孫への贈りものとなる。

- ・民有地であった頃の昔の山の姿に戻して欲しい。

〔市〕・健全な森、明るい森に再生する為に早急な整備が必要。

- ・自然の残る身近な都市公園として将来にわたり人の手で管理し続ける。

〔会〕・基本的には、森は自然の営みのままに任すべきである。この基本を踏みはずさない範囲で市民が散策を楽しむための最小限の整備をする。

- ・富山の気候のもとでは、森は暗く、下草が繁るのは自然。明るい森として維持管理することは、それに逆行するもので多くの問題を含む。

3. 呉羽丘陵の自然保全について

〔地〕・昆虫や野鳥、動物より人間の生活の方を優先すべき。

- ・木との付き合い方については先祖から受け継いだ方法がある。山を傷めない木の切り方をすべきだ。

〔市〕・今までの調査(昭和48, 54, 57年)や科学文化センターの協力によって動植物の実態は把握し、自然保護に配慮している。整備によって一時的な影響があっても、必ず今まで以上の自然になる。

- ・整備事業は開発でないので環境アセスメントは必要ない。

〔会〕・不十分な認識で自然に手を加えていることが問題。このままの認識で、

森を維持管理するには大変な労力がかかり、多くの動植物の生息を困難にする。今まで以上の豊かな自然になるとは考えられない。

- ・富山市の自然のとらえ方は造園的あるいは林学的な発想に偏り、森全体をひとつの生態系としてとらえる見方が欠けている。

- ・呉羽丘陵の自然を正しく認識し、評価するため科学文化センターだけでなく、広い範囲から専門家の意見を取り入れ議論できるような会が必要。

- ・自然と人間が共存することは可能である。呉羽丘陵の動植物が減るということは、いろんな意味で私たちの暮らしが貧しくなるということを意味する。

4. 「呉羽丘陵の整備はいかにあるべきか」についての基本的な考え。

〔地〕・手を入れる林とそのまま残した方がいい林を区別して整備すべき。

〔市〕・整備計画に示したように予定通り行う。

- ・自然保護団体連絡協議会の要請への回答(11月25日付)から。

本年度の事業はよりよい整備のため、原則として広葉樹林の整備には重機を使用する作業内容とはなっていません。また野鳥産卵期をはぶいた工期設定を行うとともに、専門家や研究機関などの御意見を反映したよりきめ細かい整備を実施することにしております。

〔会〕・樹木の伐採や下草刈りは、車道と遊歩道の使用に差し障る箇所に限り行う。間伐は必要ない。

- ・遊歩道の整備(方法には異論がある)、道標の整備、竹林あとの植栽、管理は必要。

と簡明にまとめてあると思う。

しかし伐採の現状は前述のとおりで相当ひどく、むしろ見事に伐採され丸坊主に近い状態が梨峠越しにみられるところもある。これらの実態をみて思い出されるのは、富山市公会堂前に大きく掲げられた小学生の考えた「木を切るな木は自然のガードマン」という標語で、富山市の整備のやり方は小学生の願いが活かされておらず残念に思う。

歩行と健康

余談であり私事で恐縮であるが、私は40数年間富山県につとめそのほとんどの40年近く保健所長をしており退職後の現在も民間の検診機関につとめ、地域の方々や職域の方々の健康問題に取り組んでいるので健康とゆとりのもり整備事業に、その面からも関心を持っている。最近のわが国の保健上優慮すべき問題のひとつに若年者の血清コレステロールの上昇があり20才代以下では、アメリカ人のそれを上回ることである。このことは虚血性心疾患の増加に結びつき将来に大きな危惧を投げかけている。その原因は食生活の欧米化に加え運動不足が問題となる。運動不足の原因はいうまでもなく急速に進んだ車社会で、人間の歩く権利を奪ってしまったともいえる。この意味からも、遊歩道を整備し丘陵のふもとから頂上まで歩いて登れるような計画を進めるべきである。遊歩道は人がすれ違えるだけで十分で、こと更に木を切って拡張する必要はない。体力に応じたコースが選べるよう道標や案内板を自然の景観を損なわないように整備することも必要であろう。

森にやすらぎを求めて

森林と健康との関わりの中で重要なのは、われわれの心、精神に対する影響、ストレスの解消だと思われる。森の中を歩いていると世の中の雑事を忘れさせ壮快な気分になることは誰しも経験するところである。森林浴ということがよくいわれるが森の空気の中に

フィトンチットという生物活性物質が含まれ健康によいといわれている。この物質については、まだ十分解明されておらず私にはそれよりも森の静寂、心地よい緑の色、木々の香り、新鮮な空気など心を和ませてくれる精神的影響の方が健康に関わりが深いと考える。

風景も心の安らぎに大切な要素だと思うが、だからといって眺望をよくするため尾根筋の道路わきを伐採してよいことにはならない。特に城山頂上から南の尾根筋の遊歩道は、一部緑のトンネルになっており、それをくぐりぬけてちょっとした広場からの立山連峰の眺望は格別である。

蝶の住む森を大切に

呉羽丘陵はアゲハチョウ類の宝庫で富山県に産するアゲハチョウ類の全種類、11種が記録されている。遊歩道は人間だけでなく蝶の通り道、「蝶道」にもなっている。蝶道の構成には蝶の吸蜜植物や幼虫の食樹が関与している。このようにアゲハチョウ類が多いのは、幼虫の植樹であるカラスザンショウが多いこととタニウツギやクサギなどの吸蜜植物が多いことに起因している。カラスザンショウは、利用価値がないので真先に伐採の対象になりやすい。

虫や鳥や動物が住める森が自然の森で、そのような環境を残すことがわれわれのつとめだと考える。

土地に適した原生林へ

富山市の公園緑地課の話では、城山一帯は呉羽山一帯に比べて植生が貧弱で樹種が少ないので一部伐採し植樹をして豊富な樹種の森に作り変える方針とのことであるが、この土地に適して育った木を切ってまで新しく造成する必要があるか疑問である。木を切るのは一瞬だが育てるのには長年月を要し、その間の手入れや費用も莫大なものとなる。樹木の存在はその木の長い歴史があるのだから慎

重に行うべきである。先の討論会での佐々先生の助言の中に「森林の最も安定したバランスのとれた姿は原生林だ」とのべておられるようにその土地に適した原生林に近づける努力が必要と思う。呉羽丘陵の雑木林、コナラなどの二次林は原生林への「遷移」の途中にある生態系とみるべきであろう。先の対立点1の「会の意見」もこのことを指している。

市では、城山一帯は小鳥の餌として目につきやすい例えば、コマユミなどの色のついた木の実が少ないので野鳥保護の面からも植樹が必要とのことであったが、過去の調査でも可なりの種類が記録されている。例に上がったコマユミにしても以前は一部車道沿いにみられたが、ムラサキシキブなどともに雑木として切られ消失している。今回の整備でもガズミやムラサキシキブなどが可なり切られている。道路わきの雑木、雑草刈りにも細かな配慮が必要と思う。

図7 森を支えていた大木



自然環境調査結果の尊重を

意見の対立点(3)の呉羽丘陵の自然保全について〔市〕は、今までの調査や科学文化センターの協力によって、動植物の実態を把握し自然保護に配慮しているとしているが、1980年の県自然保護課による「呉羽丘陵自然環境調査報告」に「昭和30年頃からの燃料変革で薪炭材の不要となった結果放置されてきた森の中で自然植生に戻りつつあるものはコ

ナラ林とそれに近い植物群落のみである。それらは今後長く人為の影響をより少なくする努力をし施策を施するならば以前の自然植性の群落を醸成することができると思われる」と記してある。これらの意見が配慮されていないことは残念なことで、いささか手遅れの感はあるが考慮を要望したい。

同報告書の昆虫の部門を担当された富山県昆虫同好会田中忠次会長の結論にも「判明した昆虫は約450種(現700種以上)に達し、その中には城山を特色づけるモンキアゲハやヒカゲチョウ、分布上あるいは生態上重要な位置を占めるアオヤンマ、サラサヤンマをはじめ狭い地域としては数多くの注目すべき種類を含んでいる。以上のことから城山は単に都市近郊の自然として貴重なだけでなく、昆虫の面からも重要な場所といえる。その意味においてこの自然が破壊されることがないように切望するものである。」と結んである。

明るい森と山火事の危険

次に市は市民の憩いの場所として誰でも自由に入れ楽しめる明るい森に改変す意図のようであるが多くの人が林内に入れば土は踏み固められ保水力を失い木は育たず森は本来の機能を失うと考えられる。またタバコ火などによる山火事の危険も重要な問題である。遊歩道と林内は絶対に禁煙にすべきである。

環境調査の継続が大切

佐々先生は「自然を守る方法は確立されたものがない」とのべられたが、そのとおりに思う。しかしくり返しになるが、今まで蓄積された科学的知見をもとに専門家や経験者の意見を十分取り入れ、生態系の破綻を最小限にとどめる努力が必要である。

また、これ程大規模な整備を行うのであれば、名目は開発でなくても環境アセスメントは実施すべきであったが、今からでも毎年環境調査を継続して記録に残すことが、日本の

将来の自然保護問題に資するところが大であると思う。

教育の森に

教育の問題として自然の森の利用を考えたい。今の子供は昔のように日が暮れるまで戸外で遊び呆けることがなくなって遊びの空間が家の中へ移動してしまいテレビ、ファミコンに夢中になっていることが多い。

子供は自然接触の経験が大切で知らず知らずのうちに自然から学ぶことが科学教育だけでなく情操教育にも役立つ。

呉羽の森を考える会でも自然観察会などを通じてこの方面での努力を続けたい。

自然保護の第一歩

最近では、地球規模での環境問題がクローズアップされている。母なる地球、緑の惑星、水の惑星とも呼ばれている地球、このかけがえのない地球を守っていく第一歩は身近な自然を理解し適切に対応していくことから始まると考える。

最後にこれまで呉羽の森を守り育てて下さった地元の農家の方々の御努力とそれに対

する感謝を忘れてはならない。

森の現状と対応と

以上、呉羽の森の自然保護問題の経緯と討論会の内容についてのべたが、「考える会」では12月21日にこのパネルディスカッションの概要を報告するとともに、再三にわたる要望にも関わらず大切な自然がどんどん失われていく現状から早急な再検討を切望する陳情書を富山市長に提出した。しかし冬期間を通じ細かい配慮もなく伐採、下草刈りは更に拡大し、新たに丘陵の中でも自然度の高い貴重な部分を切り開いて砂利を敷いた遊歩道をつくり、伐採後には従来この地にはみられなかった樹種を含む多種類の不自然な植樹が行われ庭園化が進められている。会事務局の九鬼とも子さんは、「新年になって雪をかぶった呉羽丘陵は、毛の抜けた獣のように痩せてみえ愛しく感じられた。」とある自然保護誌に書いておられるが、全く同感である。

自然保護問題の難しさとむなしさをつくづく感じさせられる。たびたびのべられたところであるが衆智を集めた今後の対応こそが重要と思う。